広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	絵本の反応におけるジェンダー ： 主人公の性別が異なる三冊の絵本に対する子どもの感想記述から
Author(s)	明尾，香澄
Citation	論叢 国語教育学 , 17 : 20 - 30
Issue Date	2021-07-31
DOI	
Self DOI	10.15027/52308
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052308
Right	
Relation	

絵本の反応におけるジェンダー

―主人公の性別が異なる三冊の絵本に対する子どもの感想記述から―

明 尾　香 澄

1　研究の目的

『幼稚園教育指導要領』（2018，文部科学省）でも絵本や物語などに親しむことが示されているように、幼児教育において絵本や物語の重要性は言うまでもないだろう。読み聞かせなどの絵本を用いた活動は、日常的に行われている。しかし、子どもが接する機会の多い絵本には、ジェンダーの量的な不均等やステレオタイプ的な表象が見られることが指摘されてきた。例えば武田京子（1999）では、『こどものとも』創刊号から 504 号までを分析対象とし、社会環境の変化によってその表象に変化があることが指摘されている。ここからは、社会環境の変化によって男女の描かれ方が流動的になっていることが分かる。しかし、繰り返し読まれるという絵本の性質上、近年においても絵本において固定的なジェンダー表象がなされていることは明白である。西川晶子（2017）は、累計 100 万部以上発行された絵本を示した『ミリオンぶっく 2015』の分析を行い、その結果として、主人公をはじめとした登場人物の性別に量的な不均等が見られること、またその行動や性格において固定的なジェンダー観が表象されることを指摘する。またそのようなジェンダー差は絵本における言葉遣いにも見られる。佐竹久仁子（2019）では、絵本における言葉遣いを対象に分析が行われ、言葉遣いの性差が明確に見られることが指摘される。松田こずえ（2020）では、IFLA（国際図書館連盟）「絵本で世界を知ろうプロジェクト」において選定された絵本をノルウェーと日本で比較し、そのジェンダー差を分析している。その分析においては、どちらの国においても動物や男性の主人公が多いことが示される一方、どちらでも性別役割のステレオタイプを伝える絵本は選ばれていないとする。しかし、日本では明るく楽しいストーリーが多く選ばれる中で、根強くステレオタイプが残っていることを指摘している。石川聡子・山名幸世（2021）では、1950 年代から 2010 年代の間に刊行された 2000 冊以上の子供向け絵本がその職業によって分析され、男女割合のアンバランスが解消される傾向が見られる一方で科学技術分野には変化が見られないことを指摘する。

上記の先行研究が示すように、絵本におけるジェンダー表象は固定的なジェンダー観からの脱却が意識されながらも、依然ステレオタイプ的なジェンダー表象がなされていることが指摘できる。「子どもが接する物語」という点に目を移すと、小学校教科書のジェンダーの視座からのテキスト分析も行われてきた。例えば味呑文絵（2007）は国語教科書をジェンダーの視点から量的・質的に分析し、そのどちらにおいても固定化されたジェンダー概念が見られることを指摘する。永田麻詠（2012）は隠れたカリキュラムから小学校国語科教科書の分析を行い、「男子中心」「性別役割規範」「男女二元論」「異性愛主義」[1]が残っていることを述べる。このようなジェンダー表象の問題は国語科だけに限らず、道徳教科書にも見受けられる。勝木祥子ら（2020）は道徳教科書のテキスト分析を行い、主人公である中心人物の性別に量的な不均衡があることを示す。上森さくらら（2020）も道徳教科書の量的分析を行い、「教科書で描かれている男女二元論は社会の多様な性の在り方と乖離しており、性別役割分業は社会の現状を誇張している」（p.60）ことを指摘する。子どもは絵本や物語を通してジェンダーの量的な不均衡やステレオタイプ的な表象に触れていることが分かる。

以上示してきたように絵本や物語の分析が行われ、ジェンダーの視点から見た課題が依然指摘され続けている。このような絵本を子どもが読むことによって、固定的なジェンダー観が内面化されていってしまうことは明白だろう。森本エリ子（1998）は小学校中学年を対象とし、子どもの物語の初発の感想を、主人公や登場人物への同化傾向を中心に分析している。その結果として、登場人物への同化傾向は年齢差よりも性別に影響を受け、「男女ともに主人公に同化している。しかし、けれども、異性だとその深さには限界が見られた」（p.40）ことを指摘する。ここから、物語の登場人物の性別によって同化などの子どもの反応が影響を受けることが示唆される。しかし、このように実際に絵本を読んだ子どもがどのような反応を見せるのかについては十分な調査や検討がなされていない。特に子どもの年齢が低いほど難しいものとなる。それは、絵本を読んだ後の子どもの反応は、「話す／書く」などの表出を伴わなければ見取ることができないこと、また言葉の未熟さから表出が困難であることに起因すると考えられる。そこで、本稿ではある程度書き言葉によって自分の思いや考えを表出できる小学校 2 年生を対象とし、主人公の性別が異なる絵本に対する子どもの反応をジェンダーの視座から検討してみたい。

本研究は、以降で示す三冊の絵本が子どもに与える影響を直接的に検討するものではない。子どものジェンダー観は周りの全ての環境に影響を受け、またそれらは時間を重ねながら内面化していくからである。「絵本→子ども」への影響ではなく、子どもに内面化されているジェンダー観が絵本をトリガーとしてどのように表出するのかという、「子ども→絵本→子ども」のジェンダー観を検討することが目的である。絵本を媒介とすることによって子どもにどのようなジェンダー観が内面化されているのかの一端を示し、そこにジェンダーによる差異や特徴が見られるのかを考察していく。

２　研究の方法

稿者は小学校 2 年生の国語の授業において、様々な目的のもと絵本を読み聞かせ、それぞれが感想を記入した後、それを交流する活動を行ってきた。本論では、絵本の読み聞かせを聞いた後子どもが個々人で書いた感想記述を分析対象としたい。特に主人公の性別に着目し、主人公の性別によって子どもの反応にどのような変化が見られるのかを分析・考察する。具体的には「主人公が男性」である『めっきらもっきらどおんどん』、「主人公が複数おり、男性／女性の両方」である『こうえんで…4 つのお話』、「主人公が女性」である『わたしのそばできいていて』の絵本において子どもが書いた感想記述を分析対象とし、KH-corder3 のテキストマイニングを用いて頻出語を絵本別／男女別で示すことで、ジェンダーの視座から見た子どもの絵本に対する反応を検討したい。

本分析はその分析の特性上、生まれた時の生物学的性で男女を一旦区分し分析を行う。この点に本分析の困難さと課題がある。子どもの性別は男／女で分けられるようなものではないからである。本論は男女二元論の立場に立つものではない。しかし、分析対象となる子どもは生物学的な性によって男女別の制服を着用する児童であり、社会的に男女が区分された中で生活を行っている。「自分が男である」か「自分が女である」かを環境的に否応なく意識せざるを得ない子どもであるといえる。このことは、制服だけに限らず、現代社会の中では頻繁に起こり得ることでもあろう。そのような状況の中にいる子どもたちが、絵本の主人公の性別の違いによって、どのような反応の違いを見せるのか、またそこにどのようなジェンダーの違いがあるのかを考察していきたい。

３　分析対象とする活動の概要

３．１．活動概要

対象とする活動は、全て小学校 2 年生（男児 16 名、女児 15 名）を対象に 2018 年度の国語科の授業の中で行った。話し合いや読解、ブックトークなど様々な目的の中で絵本を扱った授業の一場面である。どの絵本においても教師が読み聞かせを行い、その後子どもが一人で感想を記入した。その感想を元に、グループや全体で感想の共有や話し合いを行っている。分析対象となるのは、絵本の読み聞かせ後に子どもが書いた感想カードの記述である。

３．２．絵本のあらすじ

ここでは、それぞれの絵本のあらすじを示す。取り扱う絵本は、男性が主人公である『めっきらもっきらどおんどん』、男女の両方が主人公である『こうえんで…4 つのお話』、女性が主人公である『わたしのそばできいていて』である。

男性が主人公　『めっきらもっきらどおんどん』[2]

かんたという男の子が神社の木の根の穴から妖怪のいる異世界に落ち、そこで妖怪たちと遊ぶ。楽しく過ごしていたが、しばらくすると寂しくなり、帰りたくなって、「お母さーん！」と叫ぶと現実世界に戻っている。

男女両方が主人公　『こうえんで…4 つのお話』[3]

父と娘、母と息子の四人のそれぞれの一人称視点で公園での出来事が語られる話。娘のスマッジと息子のチャールズは公園で一緒に遊び、それぞれの飼い犬のアルバートとビクトリアも公園で一緒に遊ぶ。それぞれの公園での振る舞いやその時の気もちが示され、一冊の絵本の中で男女どちらもが主人公になっている。

女性が主人公　『わたしのそばできいていて』[4]

字が上手く読めず、音読ではみんなに笑われていたマディが図書館にいた犬のボニーに読み聞かせを繰り返すうちに字が読めるようになり、音読ができるようになる。マディが音読ができるようになったことを図書館に報告にいくと、ボニーも出産し、子どもを産んでいた。

３．３．分析時の留意点

分析は KH-coder3 を用いて行うが、分析に合わせて子どもの記述を以下のように修正している。

・小学校 2 年生で未習の漢字が多くひらがなが多いため、適宜漢字に変換している。

・以下のような誤字については修正を行っている。

①助詞のミス　例）それお→それを　　②長音や促音のミス　例）ゴージャース→ゴージャス

③送り仮名のミス　例）一とつ→一つ　など

上記のように漢字や誤字については修正を行ったが、文法上のミスは修正していない。なお、KH-coder3 で頻出語を抽出する際には、絵本に出てくる登場人物や特別な言い回しについてのみ、語句としてまとめて抽出できるよう設定している。以下が、それぞれの絵本において設定した強制抽出語である。

『めっきらもっきらどおんどん』かんた（くん）　もんもんびゃっこ　おたからまんちん　しっかかもっかか　めっきらもっきらどおんどん　ちんぷくまんぷく　あっぺらこのきんぴらこ　じょんがらぴこたこ
『こうえんで…4 つのお話』くそ犬　スマッチ（さん）　チャーリー　アルバート　ビクトリア　チャールズ

『わたしのそばできいていて』マディ（マディー）　ボニー　テンプル（さん）

４　主人公の性別が異なる三冊の絵本の分析

ここでは、男性が主人公である『めっきらもっきらどおんどん』、男性二人、女性二人の計四人の登場人物それぞれの視点から語られる物語であり、男女両方が主人公となる『こうえんで…4 つのお話』、女性が主人公である『わたしのそばできいていて』の三冊の絵本において子どもが記述した感想を分析・考察する。具体的には KH-Coder を用いて頻出語を抽出することで使用される語句の量的ジェンダー差を考察する。特に性別に関わる語句（男/女など）に着目し、その他の語句をふまえながら、絵本に対する男児/女児両方の反応を検討していく。

４．１．主人公が男性の物語における子どもの反応―絵本『めっきらもっきらどおんどん』

まず、『めっきらもっきらどおんどん』に対する子どもの反応の頻出語一覧を示す。

【『めっきらもっきらどおんどん』女児の反応　頻出語】

抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数
思う	18	お化け	2	ぴ	1	高	1	適当	1
友達	10	お宝	2	へんてこ	1	最後	1	天才	1
歌	9	一番	2	めっきらもっきらどおんどん	1	子ども	1	逃げる	1
水晶	7	会う	2	ょ	1	思い出す	1	入る	1
遊ぶ	7	回	2	タイツ	1	思い出せる	1	髪の毛	1
もんもんぴゃっこ	6	海	2	タイム	1	持つ	1	飛べる	1
化け物	5	顔	2	マシン	1	弱い	1	分かる	1
歌う	5	吸い込む	2	マント	1	手	1	母	1
妖怪	5	見える	2	メモ	1	少し	1	本当に	1
おたからまんちん	4	国	2	意味	1	少年	1	魔法	1
丸太	4	最初	2	家	1	乗る	1	夢	1
空	4	集める	2	過ぎる	1	色	1	面白い	1
穴	4	住む	2	回数	1	心	1	戻る	1
不思議	4	食べる	2	絵	1	心細い	1	絡み合う	1
木	4	真っ青	2	確かめる	1	神社	1		
お母さん	3	不気味	2	覚える	1	身長	1		
しっかかもっかか	3	忘れる	2	帰る	1	人	1		
びっくり	3	欲しい	2	気	1	数える	1		
感じる	3	ぁ	1	叫ぶ	1	足	1		
行く	3	あっぺらこのきんぴらこ	1	玉	1	多分	1		
長い	3	いつ	1	隈	1	太る	1		
飛ぶ	3	お腹	1	劇	1	大きい	1		
怖い	3	かわいそう	1	決める	1	大声	1		
名前	3	きれい	1	幻	1	掴む	1		
あの	2	ちんぷくまんぷく	1	好き	1	庭	1		

【『めっきらもっきらどおんどん』男児の反応　頻出語】

抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数
思う	15	戻る	3	お化け	1	絵	1	数える	1
不思議	13	予想	3	お宝	1	間違える	1	声	1
世界	9	あっぺらこのきんぴらこ	2	じょんがらぴこたこ	1	帰る	1	赤ちゃん	1
友達	8	しっかかもっかか	2	すき	1	吸い込む	1	足	1
歌	6	ま	2	たか	1	泣き声	1	多分	1
妖怪	6	めっきらもっきらどおんどん	2	び	1	金色	1	断る	1
木	5	歌う	2	む	1	九尾	1	着る	1
おたからまんちん	4	丸太	2	めちゃくちゃ	1	靴	1	長い	1
お母さん	4	泣く	2	ゃ	1	現実	1	適当	1
言う	4	見る	2	ょ	1	言葉	1	背	1
面	4	元	2	アトラクション	1	交換	1	疲れる	1
遊ぶ	4	高い	2	ジェット	1	光	1	普通	1
CG	3	最後	2	ジャンプ	1	行き	1	分かつ	1
ぷ	3	作る	2	バテバテ	1	行く	1	宝石	1
もんもんぴゃっこ	3	歯	2	バネ	1	国	1	宝物	1
ビール	3	自分	2	プリンター	1	差し込む	1	本当に	1
化け物	3	食べる	2	ルール	1	最初	1	魔法	1
気	3	水晶	2	意味	1	最大	1	無くなる	1
空	3	飛べる	2	違う	1	使える	1	名前	1
見える	3	怖い	2	王	1	思い出せる	1	面白い	1
持つ	3	変	2	王様	1	実	1	夜空	1
人間	3	木の下	2	化ける	1	習う	1	落ちる	1
飛ぶ	3	遊び	2	家	1	出す	1	竜巻	1
味	3	欲しい	2	会う	1	書く	1		
夢	3	D	1	海	1	乗る	1		

頻出語からジェンダーによる使用語句の差異は認められなかった。主人公のかんたは、「お母さん」と叫ぶことで異世界から現実世界に戻ることになったが、その「お母さん」という語句についても男児は 4 例，女児は 3 例（加えて「母」という語句の使用が 1 例ある）で使用差は見られなかった。女児の反応において「少年」という語句の使用が 1 例みられるが、これは主人公が「天才少年」であることを説明する中で示されたものであり、女児の特徴とは言い難い。他の語句をみると、男児がより「不思議」という語句を使っているが、これは数名の男児が「〇〇が不思議。〇〇が不思議。」という形で謎に思ったことを次々と書いていったためであり、個人的な記述の仕方に由来すると考えられる。

４．２．主人公が男女両方の物語における子どもの反応―絵本『こうえんで…4 つのお話』

続いて『こうえんで…4 つのお話』における子どもの反応を検討したい。以下がそれぞれの頻出語一覧である。

【『こうえんで…4 つのお話』女児の反応　頻出語】

抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数
犬	16	花	3	遊ぶ	2	言葉	1	動物	1
ゴリラ	14	気	3	う	1	呼ぶ	1	読む	1
かわいそう	12	好き	3	お父さん	1	後	1	二つ	1
くそ犬	10	四つ	3	お腹	1	散歩	1	入る	1
サル	10	子ども	3	すべり台	1	産む	1	疲れる	1
言う	9	上手	3	ゴージャス	1	残る	1	不思議	1
思う	9	登り	3	ステージ	1	思い	1	服	1
お話	7	入れる	3	ダメ	1	飼う	1	物語	1
不思議	7	番号	3	バラ	1	次	1	抱える	1
面白い	7	噴水	3	パパ	1	寂しい	1	名前	1
顔	6	話	3	悪い	1	終わる	1	迷子	1
人間	6	お茶	2	安心	1	少し	1	野外	1
一つ	5	お母さん	2	意味	1	笑う	1	両親	1
最初	5	きれい	2	一緒	1	心	1		
アルバート	4	と	2	一番	1	心配	1		
シーソー	4	びっくり	2	泳げる	1	水	1		
ビクトリア	4	コップ	2	家	1	生ける	1		
公園	4	スマッチ	2	会う	1	声	1		
最後	4	泳ぐ	2	絵本	1	男	1		
尻	4	行く	2	楽しい	1	男の子	1		
人	4	子	2	嬉しい	1	仲良い	1		
分かる	4	出る	2	帰る	1	喋る	1		
木	4	女の子	2	嫌い	1	喋れる	1		
チャーリー	3	怒る	2	見つかる	1	追いかける	1		
チャールズ	3	日本	2	元気づける	1	登る	1		

【『こうえんで…4 つのお話』男児の反応　頻出語】

抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数
犬	18	子ども	2	出る	1
くそ犬	14	大人	2	書く	1
ゴリラ	13	着る	2	続ける	1
サル	13	追いかける	2	題名	1
面白い	13	天使	2	喋る	1
お話	11	普通	2	銅像	1
思う	10	服	2	二つ	1
言う	8	噴水	2	入る	1
かわいそう	7	話	2	買う	1
不思議	7	おしゃれ	1	八つ	1
四つ	6	と	1	分ける	1
人間	6	めちゃめちゃ	1	歩く	1
分かる	6	シーソー	1	本当	1
尻	5	チャスミン	1	名前	1
きれい	4	パンツ	1	流れ	1
びっくり	3	一つ	1	六つ	1
公園	3	羽	1	話す	1
悲しい	3	言葉	1	嗅ぐ	1
本	3	広い	1		
違う	2	豪華	1		
家	2	黒い	1		
顔	2	三つ	1		
気	2	四つ目	1		
五つ	2	子	1		
最後	2	飼う	1		

男女の頻出語の語句数を比較すると、女児 113 語、男児 68 語と大きな差が見られる。この物語では、登場する犬が「くそ犬」と罵倒される場面があるため、男女とも子どもの反応はその部分に集中している。特に「くそ犬と言われてかわいそうだった。」のような形で、罵倒されたことをかわいそうだと感じた子どもが多かったようだ。「かわいそう」という語句使用は女児の方が多く見られるが、男児の「悲しい」は「くそ犬と呼ばれて悲しそうだった。」のように「くそ犬」とセットで使われるものであり、「かわいそう」と「悲しい」が同様に使用されていることを考えると、女児は合わせて 12 例、男児は 10 例と差分があるとは言い難い。どちらも「くそ犬」がかわいそうだと同情を示している。他方で、性別に関わる語句を見ていくと、そこには語句使用に明確なジェンダー差が見受けられた。性別を示す語句を比較すると、男児では抽出された語がなかったのに対し、女児では「お母さん」が 2 例、「女の子」が 2 例、「お父さん」「パパ」「男」「男の子」「両親」が各 1 例ずつ見られたのである。ここでは具体的にどのような文脈の中でそれぞれの語句が使用されているのかを確認したい。

女の子	女の子の声がした。
女の子・男	あとサルは木登りができるのに、サルの女の子ができなかったけど男のサルはできてたからおかしかった。
男の子	男の子みたいに木登りしてみたいなと思った。
お母さん	ビクトリアのお母さんの言葉がおもしろかった。
	子どもやお母さんがサルやゴリラで不思議だった。
お父さん	あと最後の話の噴水に犬が入ったところと最後にお父さんに花のお水をあげたところが一番おもしろかった。
パパ・両親	パパにおいしいお茶を入れてあげたことが両親思いだなと思った。

「男」「男の子」の記述においては、猿の男の子が木登りが得意だと言って木登りをしていることに触れ、「女の子ができなかったけど男のさるはできてたからおかしかった」「男の子みたいに木登りしてみたいな」と、物語における男女の行動の異なりに敏感に反応していることが見て取れた。

また、「ビクトリアのお母さん」「子どものお母さん」「お父さんに花のお水をあげた」「パパにおいしいお茶をいれてあげた」「両親思い」など、登場人物間の関係を意識した記述が見受けられるのも特徴的であるといえよう。この絵本はそれぞれの登場人物が一人称視点で物語っていくため、その関係性は捉えづらい。俯瞰的にそれぞれの関係を考える必要がある。女児においては、より物語を俯瞰的に捉え、それぞれの関係性について不十分ながら考察するに至っているといえる。しかし、男児においても、「大人」という語句は 2 例見られる。具体的には次のような記述である。

大人	子どもがサルで大人がゴリラのところがおもしろかったです。
	子がサルで大人がゴリラだった。

男児の記述は 2 例とも「子どもはサルで、大人はゴリラ」という点のみへの言及であり、関係への意識は希薄である。これらの語句の使用からは、女児がより登場人物の性別を意識し、登場人物間の関係を俯瞰的に捉えようとする傾向があることが示唆される。

４．３．主人公が女性の物語における子どもの反応―絵本『わたしのそばできいていて』

女性が主人公の絵本における『わたしのそばできいていて』についても検討を行いたい。それぞ

れの頻出語一覧は以下の通りである。

【『わたしのそばできいていて』女児の反応　頻出語】

抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数
ボニー	30	女の子	5	伝える	2	絵	1	出す	1	普通	1
マディ	30	練習	5	文字	2	楽しむ	1	出る	1	複雑	1
思う	26	言う	4	毎日	2	叶う	1	出会う	1	文	1
犬	19	最初	4	名前	2	感動	1	出産	1	勉強	1
読む	16	子ども	4	面白い	2	願い	1	心	1	本当に	1
産む	13	先生	4	貰う	2	願う	1	人間	1	魔法	1
図書館	13	知る	4	優しい	2	喜び	1	正反対	1	毎週	1
読める	12	クラス	3	あ	1	奇跡	1	生まれ変わる	1	目	1
本	12	スラスラ	3	あと	1	気	1	生徒	1	貰える	1
字	11	メス	3	いつ	1	泣く	1	他	1	問題	1
星	11	子犬	3	アイス	1	教える	1	待つ	1	勇気	1
びっくり	10	え	2	イヌ	1	兄弟	1	大変	1	欲しい	1
かわいそう	9	たくさん	2	インコ	1	形	1	男	1	両親	1
シール	8	クス	2	オウム	1	嫌	1	注意	1	歴史	1
頑張る	7	ボニー	2	オス	1	嫌う	1	長い	1	連れる	1
笑う	7	一緒	2	コツ	1	見る	1	伝わる	1	話	1
テンプル	6	一番	2	スター	1	言える	1	土曜日	1		
ハート	6	気持ち	2	ニュース	1	言葉	1	当たり前	1		
嫌い	6	苦手	2	ハム	1	行う	1	動物	1		
最後	6	持つ	2	マーク	1	国語	1	内容	1		
赤ちゃん	6	上手	2	リス	1	産婦人科	1	難しい	1		
不思議	6	場所	2	一大	1	算数	1	必ず	1		
分かる	6	人	2	英語	1	残る	1	病院	1		
学校	5	前	2	音読	1	思いやり	1	不安	1		
行く	5	諦める	2	家	1	時に	1	普通	1		

【『わたしのそばできいていて』男児の反応　頻出語】

抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数
ボニー	27	渡す	3	メス	1	進化	1	鳴く	1
犬	24	読める	3	意味	1	人間	1	面白い	1
マディ	21	分かる	3	一気に	1	生徒	1	目	1
図書館	19	良い	3	間違い	1	先生	1	優しい	1
思う	16	ニュース	2	間違う	1	前	1	流れ星	1
本	14	引き受ける	2	願い	1	想像	1		
読む	11	絵本	2	喜ぶ	1	他	1		
シール	10	叶える	2	緊張	1	大事	1		
産む	10	頑張る	2	見る	1	大人しい	1		
星	10	教える	2	言う	1	題名	1		
ハート	8	子	2	言葉	1	知り合う	1		
好き	8	知る	2	荒らす	1	諦める	1		
子ども	6	聞く	2	高い	1	土曜日	1		
行く	5	本当	2	合体	1	踏み出せる	1		
笑う	5	来る	2	産める	1	動かす	1		
赤ちゃん	5	練習	2	子犬	1	動物	1		
不思議	5	いつ	1	持ち歩く	1	読書	1		
持つ	4	お父さん	1	自分	1	謎	1		
人	4	ご飯	1	車	1	脳みそ	1		
大きい	4	だめ	1	出る	1	買う	1		
テンプル	3	びっくり	1	小さい	1	白い	1		
家	3	ほか	1	少し	1	聞かす	1		
気	3	まちがい	1	上手	1	変	1		
嫌い	3	エンジン	1	場面	1	母	1		
字	3	オス	1	食べる	1	本当に	1		

まず特徴的なのは、「かわいそう」という語句が女児において 9 例も見られることである。これは、主人公マディの「字が読めないこと」「みんなに笑われていること」「ハートのシールばかりもらっていること」「ボニーがいなくて泣いていること」という状況に共感／同情し、「かわいそう」と記述しているものである。これは男児には見られなかった。女児においてより主人公への共感／同情の言葉が表出されているといえよう。しかし、これを早急に「女児は主人公に共感しやすい」と結び付けてはならない。なぜなら、『こうえんで…4 つのお話』においては「くそ犬」と呼ばれた犬に対しては男児・女児の両方が同程度「かわいそう」または「悲しそう」という共感／同情を示していたからである。女の子のマディにのみ男児は「かわいそう」という共感／同情を示していないのである。これは、主人公が女性であった場合に男児の反応が影響を受けることを示している。

次に性別に関わる語を見ていくと、『こうえんで…4 つのお話』同様、女児においてより性別に関

わる語が使用されていた。「女の子」5 例、「メス」3 例、「オス」1 例、「兄弟」1 例、「男」1 例、「両親」1 例である。文章における具体的な記述は以下の通りである。

女の子	もし生まれ変わるのならマディみたいな女の子がいい。
	女の子のマディが頑張って図書館で本を読む練習をして、クラスのみんなの前で読めたことがよかったと思った。
	女の子が本を読むことや字を読むことが嫌いだったのに、ボニーのおかげで上手になったのでよかった。
	ボニーから産まれた子どもをマディ（女の子）の家でひきとればいいと思った。
	マディ（女の子）が犬（ボニー）に本を読んでいたけれど…犬はその内容が分かっているの？
メス	最後にボニーがメスだと知った。
メス・オス	最初ボニーがメスかオスか分からなかったけど最後にボニーが九匹の子犬を産んでいたからメスだということが分かった。
兄弟	最後の「読んであげて」って言ったけど、絵を見たいから兄弟げんかしちゃうんじゃないのかな？
男	ボニーはどうして赤ちゃんを産んだの？男はどこなの？
両親	マディの両親ってひどいなと思った。

「女の子」においては、「女の子のマディが」「マディ（女の子）」など、主人公マディの性別を強調する記述となっていることがわかる。また、男性が主人公の『めっきらもっきらどおんどん』では主人公を「男の子」とすることは男児・女児のどちらにおいても見られなかったことから、主人公が女性であることが特別なこととして、特に女児の中で意識され強調されていることが示された。「メス／オス」の記述についても同様、「犬のボニーがメスだと（最初は分からなかったけれど）分かった。」ことが 2 例とも述べられており、「メス（女）」であったことが意識されている。「兄弟」「男」「両親」においては『こうえんで…4 つのお話』同様、登場人物間の関係を意識した記述がなされていることが分かる。では、男児ではそのような記述は見られなかったのだろうか。男児でも「お父さん」「オス」「メス」「母」が 1 例ずつ使用されている。具体的な記述をみてみよう。

お父さん	どうしてお父さんが出てこなかったの。
母	なぜ母が（ボニーの）いないのだろう。
メス・オス	犬はメスなのオスなの。

記述を見ると、「お父さん」「母」とその関係性を意識した記述が見られる。しかしこの記述はどちらも「お父さん」「母」の“不在”に言及したものである。「メス・オス」については「犬はメスなのオスなの」と性別の“不明”に言及していることが分かる。つまり、性別に関わる語句が“不在”と“不明”を表明するために使われているといえるのである。女児でも「ボニーはどうして赤ちゃんを産んだの？男はどこなの？」と不在に対する記述が一例見られるが、男児では主人公が女の子であることが強調されることはなく、不在と性別の不明がより問題となっていることが分かる。

また、「練習」という語句に着目したい。「練習」は男児において 2 例、女児において 5 例見られた。また「頑張る」という同様に努力を示す語において、男児は 2 例、女児は 7 例という使用数の差が見られ、女児が努力の必要性やその規範をより内面化していることが推察される。これは、主人公マディに寄り添って読み進めていることにも起因すると考えられる。

４．４．考察

以上主人公の性別が異なる三冊の絵本における子どもの反応の分析を行った。その結果、男性を主人公とする物語では子どもの反応に違いは見られず、男女どちらもが主人公である絵本や女性を主人公とする絵本においては性別の強調や登場人物同士の関係を意識した語句が女児でより使用されていた。先行研究で指摘されているように、子どもが接する絵本や物語には、男性の主人公がより多く登場する。子ども達も必然的に男性主人公の物語に数多く接することになろう。森本（1998）が指摘するように、子どもは登場人物に同化しながら読み進めるが、その同化は登場人物の性別に影響をうける。男性が主人公である場合には男児・女児のどちらもが同程度の反応を示すのに対して、女性が主人公になった場合には女児においてより共感／同情が示されたり、登場人物同士の関係が示されたりするのである。これは、女児が様々な人物に寄り添い、時には寄り添う人物を変化させたり俯瞰的に見たりしながら読んでいることを示唆している。裏返せば、男児は女性の主人公に寄り添うことが女児に比して少ないといえるのである。女性が主人公である『わたしのそばできいていて』では、女児において女性主人公の姿に共感し、その姿から規範を内面化していく記述が見られたのに対して、男児では共感／同情が行われにくくなる異なりも見て取れた。これは、男性主人公の物語を数多く読んでいることと無関係ではないだろう。女性の主人公／登場人物に寄り添って読む経験が少ないのである。

各絵本に対する記述から見られる語句数を単純に比較すると、以下の表のようになる。

【各絵本に対する記述の語句数】

絵本	女児	男児	差
男性主人公 『めっきらもっきらどおんどん』	114	123	-9
両方が主人公 『こうえんで…4 つのお話』	113	68	45
女性主人公 『わたしのそばできいていて』	141	105	36

男性主人公の物語においてのみ男児の語句数がわずかに多く、それ以外では女児の語句数が明らかに多くなっている。男児は男性主人公の場合には多様な読みの反応を見せるのに対して、女性主人公の場合にはそのような読みが抑制されてしまっているのである。一方で女児はどのような物語においても多様な読みの反応を見せ、寄り添う人物を変化させながら俯瞰的に読み進めている。男性主人公の物語に数多く触れることは、男児にとって読みの可能性を制限するものになってしまうことが示唆される。

５　おわりに

改めて強調するが、本論は性別を二元化しその認知的差異を検討することを目的としたものではない。また、性別を二元化することや、性別による二元化された認知的な差異があるとする立場にも立っていない。今回示された子どもの反応は、もちろん絵本の影響からのみうまれるものではない。その他の学校文化、家庭環境、社会的なジェンダー観などが複雑かつ複層的に絡み合って表出している。しかし、重要なのは絵本をトリガーとして表出する反応にジェンダーの差異が見られ、それが主人公の性別に影響をうけることである。これは、固定的なジェンダー観を子どもが内面化していることを意味し、同じ絵本を読んだとしてもその内面化されたジェンダー観に反応が影響されることを示している。『わたしのそばできいていて』において女児がより「かわいそう」という言葉や「練習を頑張った」という努力を重視したように、絵本を媒介として、固定的なジェンダー観

がより内面化されていってしまう危険性があるともいえよう。

森本（1998）において指摘された登場人物の性別による反応の異なりは、本研究でも見て取ることができた。小学校 2 年生という低学年段階において、このような反応のジェンダー差が見られたことは、稿者にとって衝撃的だった。子ども達はかなり幼い段階から固定的なジェンダー観を内面化し、それをもとに物語を読んでいることが示されたといえる。またそのような物語に触れ続けることで、自身のジェンダー観を強化していってしまうかもしれない。そのことは、子どもの読みの可能性を狭めるものにもなりえる。子どもが接する物語や絵本の選定、その扱い方には十分な注意が必要であるといえよう。絵本は何度も読み返すものであり、保育園や幼稚園では動作化や劇化も行われる。そのような中において、女児は異性の主人公に、男児は同性の主人公に寄り添うことを強いられやすいのである。男性が主人公の絵本だけでなく、様々な性別の主人公が登場する絵本をそろえることは必須であるといえるが、その描かれ方によっては固定的ジェンダー観をより強化してしまうことに留意する必要があると考えられる。

本分析では、子どもの記述に見られる頻出語から考察を行ったため、物語の内容や絵の描かれ方には十分に踏み込めなかった。この点については、質的で詳細な分析が必要になろう。今後の課題としたい。

【注】

1）この点については、木村季美子（2017）が高校国語科の物語教材、谷村志穂「雪ウサギ」において異性愛を中心とした読み取りがなされていることを課題として指摘している。

2）長谷川摂子作、ふりやなな画。1985 年福音館書店発行。

3）アンソニー・ブラウン作、久山太市訳。2001 年評論社発行。

4）リサ・パップ作、菊田まりこ訳。2016 年 WAVE 出版発行。

【引用文献】

・石川聡子・山名幸代（2021）「子ども向け絵本に描かれた登場人物のキャリアとジェンダー」『大阪教育大学紀要総合教育科学』第 69 巻 pp.21-40

・上森さくら・栖原佳乃子（2020）「小学校道徳教科書のジェンダー視点からの分析（１）」『教育実践研究』第 46 巻 pp.53-61

・牛山恵（2005）「小学校国語科教材とジェンダー」『都留文科大学研究紀要』第 61 回 pp.23-43

・勝木洋子・足立まな・北野聡子・杉本智美・寺田奈央・福山香織・藤村公代（2020）「教科の中の隠れたカリキュラム―ジェンダー平等の視点から見た道徳教科書の分析―」『教職課程・実習支援センター研究年報』第 3 巻 pp.23-34

・木村季美子（2017）「高校国語科におけるセクシュアル・マイノリティ教材の授業の提案―谷村志穂「雪ウサギ」を用いて―」『奈良教育大学国文：研究と教育』 pp.97-83

・佐竹久仁子（2019）「絵本の教えることばのジェンダー規範」『ことば』第 40 巻 pp.54-71

・武田京子（1999）「『こどものとも』に表れた性差」『岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』第 9 号 pp.51-61

・永田麻詠（2012）「小学校国語教科書に見る隠れたカリキュラムの考察―ジェンダーおよびクィアの観点から―」『国語教育思想研究』第 4 巻 pp.37-46

・永田麻詠（2020）「国語科教育における多様な性への対応と言語感覚の育成」『国語科教育』88 巻

pp.39-47
・松田こずえ（2020）「絵本にみるジェンダー意識と人間関係に関する研究―ノルウェーと日本の絵本の比較から―」『子ども学研究紀要』第 8 号 pp.23-32
・味呑文絵（2017）「小学校国語科教科書の中に見るジェンダー」『奈良教育大学国文：研究と教育』pp.44-32
・森本エリ子（1998）「ジェンダーを再生産する文学教材―自我形成期の子どもたちが読み取るもの―」『女性学』 pp.30-45

（広島大学大学院博士課程後期３年）